

京都市 山科区

# 中臣遺跡 第89次発掘調査報告書

2017

有限会社 京都平安文化財



# 例 言

1. 本書は、京都市山科区における個人住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

[文化財保護課受付番号 16N335]

2. 本調査は、森田清氏の委託により、有限会社 京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査面積は、130㎡である。
4. 現地調査は、平成 28(2016)年 11 月 10 日から 12 月 20 日まで実施した。  
整理・報告書作成は、平成 29(2017)年 1 月 10 日から 11 月 30 日まで実施した。
5. 発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の体制で行った。

指 導 機 関 京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課

調査検証委員 京都外国語大学教授 南 博史

同志社女子大学教授 山田 邦和

調 査 主 体 有限会社 京都平安文化財 (代表取締役・栗田尚典)

調 査 主 任 小森 俊寛

作 業 員 伊倉、井戸、大槻、菅野、西野、渡邊 (有限会社 京都平安文化財)

大西、矢嶋 (有限会社 ワーク)

測 量 ・ 図 化 浅川 永子、小林 雅幸、田中 侑

遺 物 実 測 川端 玲子

6. 遺構には、概ね検出・確認した順に番号を付し、適時遺構の種類名を添えている。
7. 挿図・図版掲載の遺物は、個体別に通し番号とした。
8. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。

上村憲章 (京都編集工房)

9. 本書の編集・執筆は小森俊寛が担当し、遺構・遺物の写真撮影は小林雅幸が主に行なった。

# 凡 例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系（国土座標第Ⅵ系）に基づいている。水準点は T.P. 値（東京湾平均海面値）を使用した。
2. 使用した地図は京都市都市計画局発行の 1：2500 を参考にし編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 50・100・150 分の 1 とした。
5. 遺構名は柱穴、土坑、溝と表記し、遺構ごとに通し番号を付加した。
6. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。
7. 遺物番号は通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
8. 本書に収録した各資料の図は本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
9. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、文末に註として掲載した。



# 本文目次

## 例 言

第1章 調査に至る経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	1
1. 発掘調査の概要 .....	1
2. 日誌抄 .....	2
第2章 遺跡の立地と環境・既往調査 .....	4
第1節 立地と環境 .....	4
第2節 既往調査 .....	7
1. 中臣遺跡の既往調査概括 .....	7
2. 調査地近接地域の既調査 .....	9
第3章 遺 構 .....	12
第1節 調査区と地区割り .....	12
第2節 基本層序 .....	12
第3節 遺 構 .....	13
第4章 遺 物 .....	18
第5章 総 括 .....	21

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	調査位置図	1	第8図	調査区平面図	14
第2図	山城国宇治郡と関連主要遺跡平面概念図	4	第9図	調査区土層断面図	15
第3図	山科区・伏見区東端部・宇治市関連主要遺跡略位位置図	5	第10図	掘込7平面・セクション断面図	16
第4図	中臣遺跡概要図	7	第11図	土坑6平面・セクション断面図	16
第5図	調査地周辺の既調査位置図	8	第12図	ピット列1・2断面図	17
第6図	調査区区割り図	12	第13図	弥生土器	18
第7図	東壁による基本層序断面概念図	12	第14図	古墳時代末期～古代初め頃の土器	19
			第15図	須恵器壺・甕片	19

## 表目次

第1表	遺構数一覧	13
-----	-------	----

## 図版目次

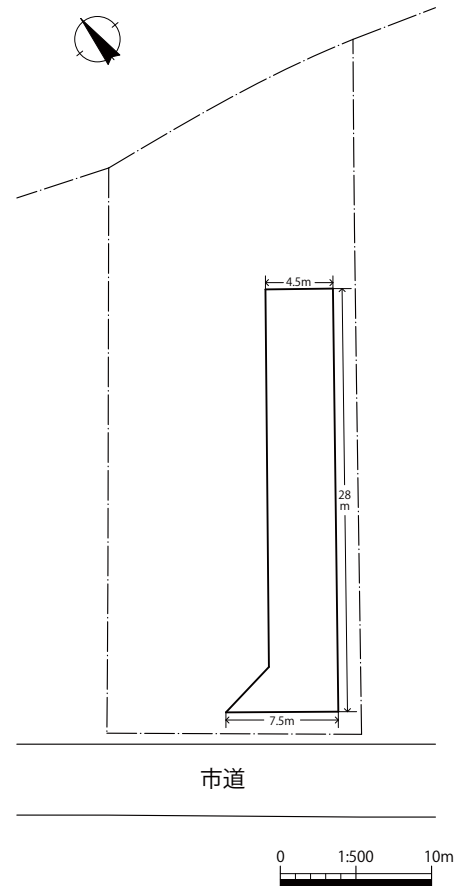
図版1	調査地全景（北東より）
図版2	1：調査区南半北部から北半（南西より） 2：調査区南部（南西より）
図版3	1：調査区北半（北東より） 2：掘込7完掘状況（南西より）
図版4	1：調査区北壁西部土層堆積状況 2：調査区南東壁中央部（掘込7）土層堆積状況 3：調査区南東壁南部土層堆積状況 4：出土遺物（土師器・須恵器）

# 第 1 章 調査に至る経緯と経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

調査地は、京都市山科区勸修寺西栗栖野町の 113 番地に所在する。当地は西北から南東流する旧安祥寺川と東でほぼ南流する山科川の合流地点の北側で、両河川に挟まれて、両者の合流地点の北側に広がる栗栖野丘陵上に展開する中臣遺跡内に位置している。

2016 年に 113 番地の当地と東側の近接地 271 番地の 2ヶ所が一括で、宅地開発の届出が京都市文化財保護課に提出された。271 番地は試掘調査の結果、後代の削平により遺構が残存していないことが明らかとなった。113 番地は、周辺隣接地の既調査で弥生時代から古代の遺構が調査されており、試掘調査を行わない形で、発掘調査を実施することとなった。文化財保護法に基づく発掘調査実施の指導に、工事主体である株式会社ランドジャパンの好意的な協力のもと、発掘調査を実施する運びとなった。実際の発掘調査は、平成 28 (2016) 年 11 月 10 日から開始し、12 月 20 日に終了している。なお、第 1 図に市保護課の指導に付されていた設定予定の調査区の図を示しておく。



第 1 図 調査位置図 (S = 1/500)

## 第 2 節 発掘調査の経過

### 1. 発掘調査の概要

調査区は、宅地開発に伴う道路予定地内に調定された南西端変形拡張した南北 4.5m × 東西 28m のトレンチ状を呈する。現地表から北部で 30cm ~ 南部で 70cm 程の深さで堆積する耕作土は、当初に機械力を取り除いた。この耕作土の直下で、数 cm の薄い変色変質した土層がかぶる部分はみられるが、ほぼ全域が地山直上とみられる遺構面を検出した。耕作土と手作業に切り替えた遺構検出作業での出土遺物からは、この遺構面は古墳時代以前から古代までの時間幅を持つと推定された。しかし、北半と南半が 25cm 前後の高低差をもって、それぞれがほぼ平坦状を呈しており、耕作地の造成に伴い雛段状の基礎工事が成されたものと見られ、生きた当時の生活面

ではないと判断された。

この地山直上遺構面では、調査区のほぼ全域で土坑やピット、掘込、落込などの各種遺構及び、中央部の東辺よりで隅丸方形状を呈する飛鳥時代頃と見られる竪穴住居址と推定される遺構などを検出し、掘り下げ調査を実施した。弥生時代と特定できる遺構は確認出来なかったが、古墳時代末期・飛鳥時代から古代初め頃に比定出来る各種の遺構を調査した。遺物では、古墳時代末期から古代初め頃だけにとどまらず、弥生時代中期から後期、あるいは古墳時代初頭のもの、また少数小片ながら中世から近世のものが出土している。

このような調査成果は、周辺隣接地を含む中臣遺跡の既調査成果にほぼ準じたものである。

以下では、ここでまず日誌抄を付し、その後遺跡の位置、環境などを記した後に、遺構・遺物の調査成果を報告する。

## 2. 日誌抄

2016年

- 11月10日 敷地内を整備し、調査区を設定
- 11日 重機掘削を行う GL-0.35m程
- 14日 壁整形及び遺構面確認作業
- 15日 壁整形及び遺構面確認作業
- 16日 南半中心に再度重機掘削を行う  
平均GL-0.6m程  
その後、壁整形と遺構検出作業を進める
- 17日 遺構面を確認し、遺構検出作業を進める
- 18日 遺構面清掃後、遺構検出状況の撮影  
平面図作成のため実測（デジタル測量）
- 21日 検出遺構の掘り下げと不明瞭な箇所の新精査  
【京都市保護課検査】
- 22日 遺構の掘り下げ調査を進める
- 24日 遺構の掘り下げ調査を進める
- 25日 遺構の掘り下げ調査を進める  
南部の遺構（土坑6）から土器検出
- 28日 遺構の掘り下げ調査を進める
- 29日 遺構の掘り下げ調査を進め、随時遺構の記録をとる
- 30日 遺構の掘り下げ調査を進める  
掘込7（竪穴住居址か）付近の新精査を行い、  
遺構の輪郭を再確認して記録をとる
- 12月1日 遺構の検出及び掘り下げ調査を進める
- 2日 遺構の検出及び掘り下げ調査を進める
- 5日 遺構の検出及び掘り下げ調査を進める
- 6日 掘込7（竪穴住居址か）を含め、遺構の掘り下げ調査を進める



写真1 重機掘削状況（南西から）



写真2 遺構検出作業（南西から）



写真3 遺構検出状況（北東から）



- 7日 遺構の掘り下げ調査を進め、ほぼ終了  
調査区南部と北部の点検作業を行う
- 8日 遺構の掘り下げ調査を進める  
掘込7の清掃後、検出状況（床面か）の撮影
- 9日 清掃後、調査区全景の撮影  
平面実測（測量）
- 12日 攪乱坑を利用して、断割り調査を行う  
平面実測（測量）
- 13日 雨天のため、現場調査作業中止
- 14日 現地説明会（参加者25名）  
【京都市保護課立会】  
平面・断面実測（測量）
- 15日 掘込7の断割り調査を行う
- 16日 平面・断面実測（測量）  
【京都市保護課検査】  
【検証委員南氏来訪】
- 19日 調査区北東部の拡張調査を行う（写真記録のみ）
- 20日 埋め戻しを行い、現場調査終了



写真4 調査区南端遺構検出状況（南から）



写真5 柱穴列検出状況（南西から）



写真6 掘込7検出状況（西から）



写真7 掘込7、一段目掘削状況（東から）

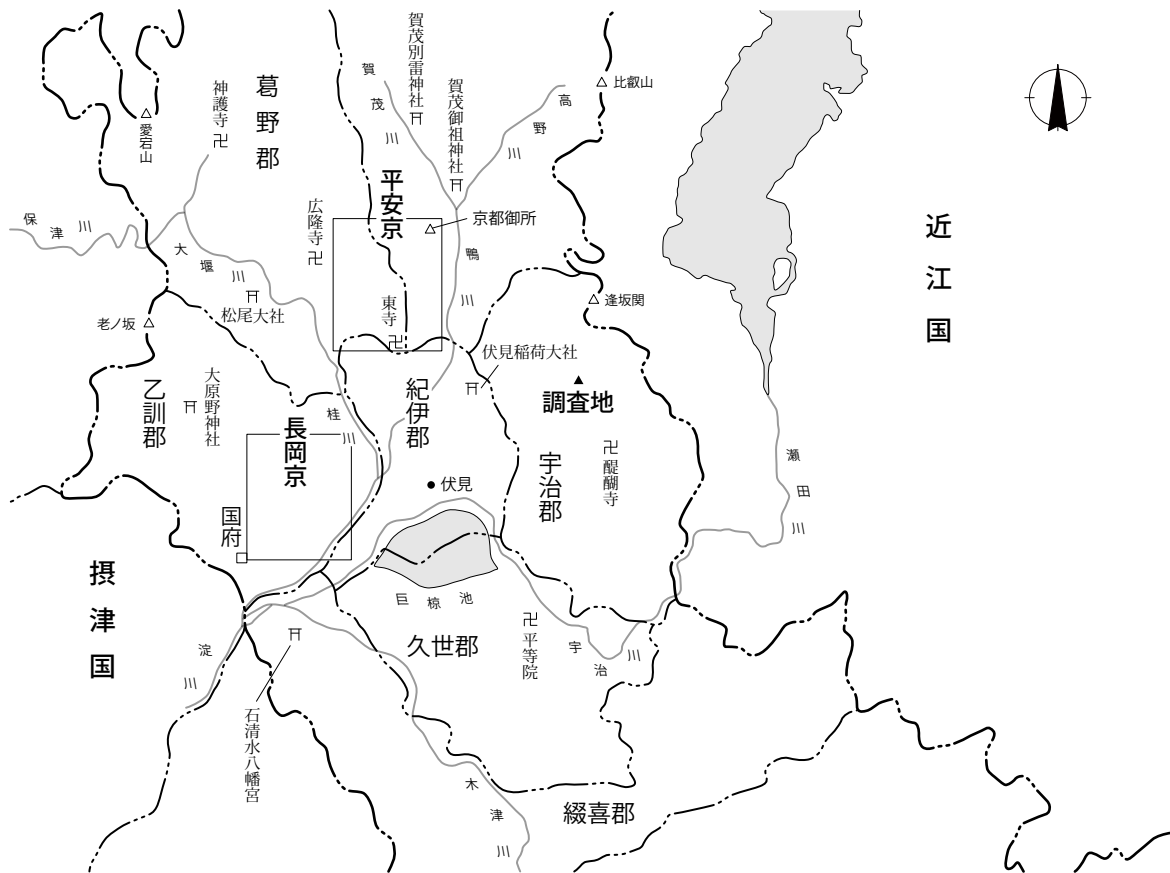
## 第2章 遺跡の立地と環境・既往調査

### 第1節 立地と環境

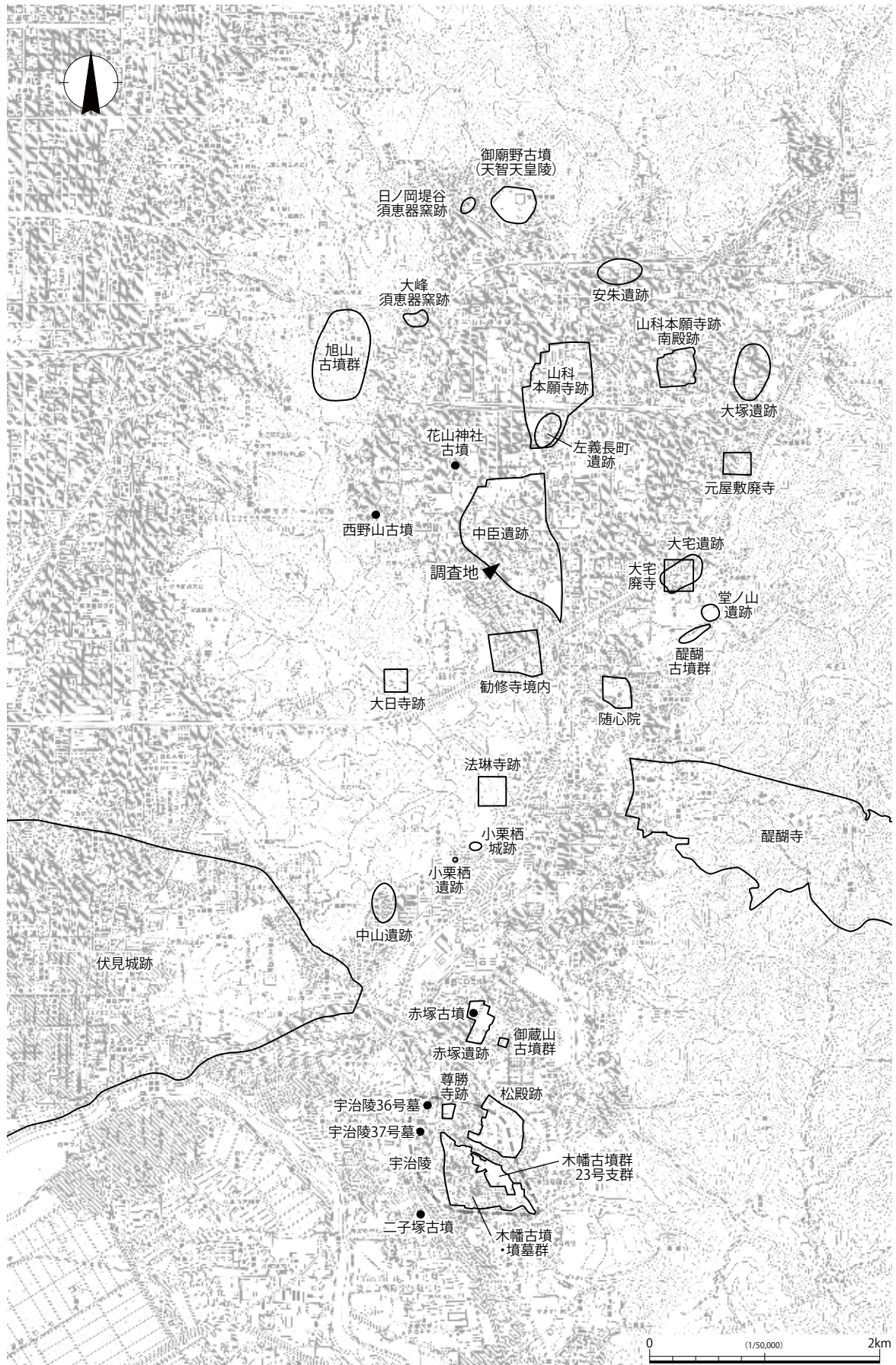
中臣遺跡の歴史的環境を理解する上で、古代において宇治郡域内の遺跡であるという視点から検討・研究された事がなかったが、古代以前の歴史的環境を考える上では前提的に認識が必要な単位であると考えている。

宇治郡内の遺跡としてとらえなおし、さらに宇治郡がおかれている山城と近江の国境、ひいては山城と近江の内での宇治郡及び中臣遺跡の歴史的位置付けを理解していくべきと考える。本格的な検討は将来の課題としておくが、ここでは宇治郡の範囲を確認し、古墳時代から古代の遺跡を若干概観しておく。

古代山城（山背）における宇治郡は、北半の現代の京都市山科区から同伏見区東端部、及び宇治川河口からほぼ現宇治川ラインの現宇治市北東半部を一つにまとめた郡域を有していた。古代においては山科の小盆地全域から、巨椋池の山科川河口から宇治川河口部をつなぐ巨椋池の北東辺までとなる。山科盆地と宇治川河口以北の巨椋池東北沿岸部を一つの郡域として括ったのか、興味ある古代の行政単位ではある。古代日本の律令国家の国郡レベルの行政単位の設定にあっ



第2図 山城国宇治郡と関連主要遺跡平面概念図



第3図 山科区・伏見区東端部・宇治市関連主要遺跡略位位置図 (S = 1/50000)



ては、地理的単位に対する配慮はもちろんあるようだが、古墳時代以来の地域勢力分断あるいは分割的にする目的の線引き、逆に地域勢力の版図を一括容認する方向での線引きがあるように見られる。小さい単位だが宇治郡の例は後者であったと見てよいと考える。理由は古代から中世の遺跡、墳墓群展開や藤原系氏族の屋敷、別荘、寺院などの郡域内への広がりがあり様に見出せる。

中臣氏との直接的関連を、根拠をもって理解を示せる遺跡はないが、山科盆地の中央西半に中臣町という地名が残る地区を中心として名称の付されたかなり広大な中臣遺跡が設定されている。中臣遺跡は弥生時代以前の遺跡も大きく重なるが、6世紀後半～8あるいは9世紀とされている古墳時代後期後半～古代の中臣十三塚古墳と集落遺跡の既調査成果が、遺跡の盛期をよく示している。中臣遺跡はこの時代の遺跡だけにおいても、山科盆地最大の集落地である。さらに時期を同じくする古墳群は、遺跡の北東の東山山地の山科側斜面頂部近くで30基以上の古墳からなる旭山古墳群、またほぼ同時期の20数基からなる古墳群が遺跡西方の高塚山山麓で醍醐古墳群として調査されている。古墳時代最末期（飛鳥時代後半）頃7世紀後葉には、大和以外では唯一と言える。天智（天皇）陵古墳が、盆地北辺部の御陵御廟野町の地に造営されている。天智天皇は、山科盆地から谷筋でつながる現在の滋賀県大津市の北半部の琵琶湖西岸の地に大津宮を営んでおり、そこで671年に没している。天智陵古墳の西側隣地の日ノ岡は、中臣（藤原）鎌足の邸宅の推定地の候補の一つである。鎌足の邸宅また初期の墓（大阪高槻へ移す前の墓）に関しては、中臣遺跡及びその南側近くの勸修寺付近が最も有力と考えられるが、京都の考古学者の今後の課題である。さらに宇治郡の南部、巨椋池の山科川河口以南、宇治川河口以北の巨椋池北東辺の岸部地帯から山裾の地域を見ると、現在の宇治市北東部地区には木幡の宇治陵郡を中心にした古墳時代後期から古代にかけて、連綿と形成の続いた一大古墳群及び古墓群が形成されている。墳墓の総数は320基以上との説もあり、墓域も御蔵山西南麓で9万㎡とみられる非常に大規模な遺跡である。平安時代に入り、円墳も含む古墓は皇后となっていた女性の墓と藤原房前以来の藤原氏北家の氏長者の墓が中心であり、現在は御陵として宮内庁の管理墓である宇治陵とされているものが数十基に及んでいる。この木幡を中心とする古墓群は、藤原氏の一大墓所であることは多言を要しないが、中臣氏との関連については文献的にも考古学的にも調査が少なく言及は難しい。しかし、宇治郡内の中臣遺跡を中心とする集落址の成立と展開とは、木幡の古墳群の成立と古墓群への連続性は時代的にほぼ重なっており、中臣の地名が中臣氏の歴史的存在を示しているとすれば、藤原氏の古墓群に連続する若干先行した前方後円墳を含む終末期の群集墳が、中臣氏と直接関連した墓址群と考えることは十分に可能である。また若干加えておくと、木幡の古墓群と関する藤原氏の古墓は、山科盆地の勸修寺や小野、醍醐、安祥寺でも確認されており、密度差はあるが宇治郡域全体に広がっていると見てよいだろう。しかし、考古学は物証を前提として立論すべき学問であり、結論を述べるのはここでは控えておく。可能性は低いだが、調査の少しでもの進展を待ちたい。しかし、古墳以外に古墓群まで加えると、宇治郡しいては山城にとどまらずこの時代においては全国的にも屈指の大墳墓遺跡であり、現行政境を越えた研究が不可欠と考えられる。

## 第2節 既往調査

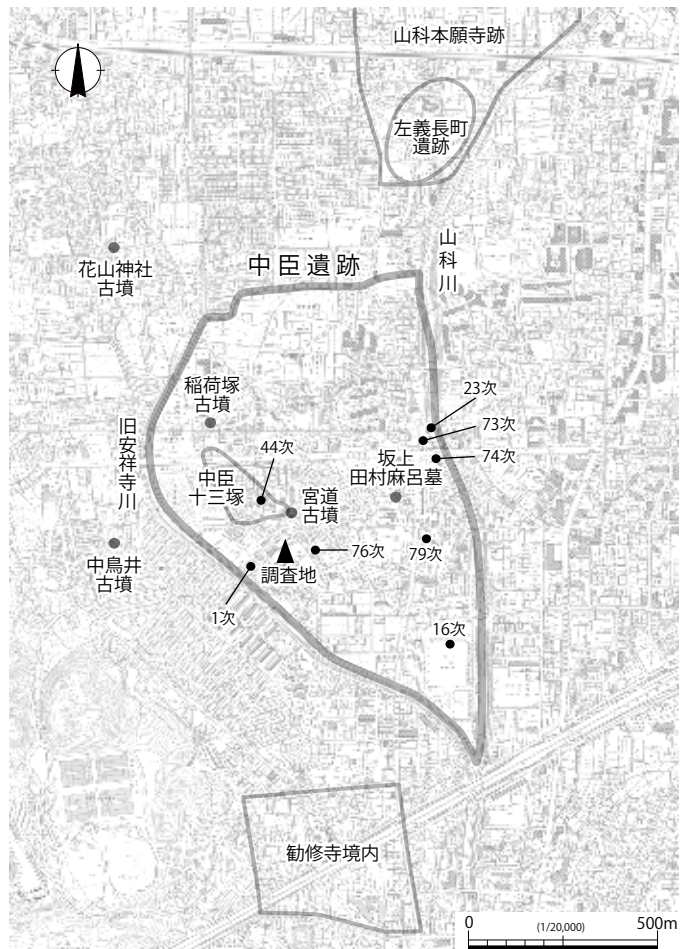
### 1. 中臣遺跡の既往調査概括

中臣遺跡は、山科盆地を南端部となる現在の宇治市市街地の北部付近までと捉えれば、袋状に広がる盆地北半部の南西部付近に位置する。遺跡の敷地範囲は、西側を旧安祥寺川、東側を山科川に挟まれて、両河川が合流する地点を南端とした南北約1.3km、東西約0.8kmに及ぶ、北辺が広がる三角形を呈する。全体では、約50万㎡以上の広大な平面規模を有した大遺跡である。遺跡は地形的には盆地低地部に立地しているが、東西は両河川に開析された小谷地形である。遺跡内は北部中央付近が高く、東西に緩く傾斜し、南へも下がる、谷地形に挟まれた小丘陵的地形を呈している。各時代の遺跡は、この低い小丘陵地形上に展開している。

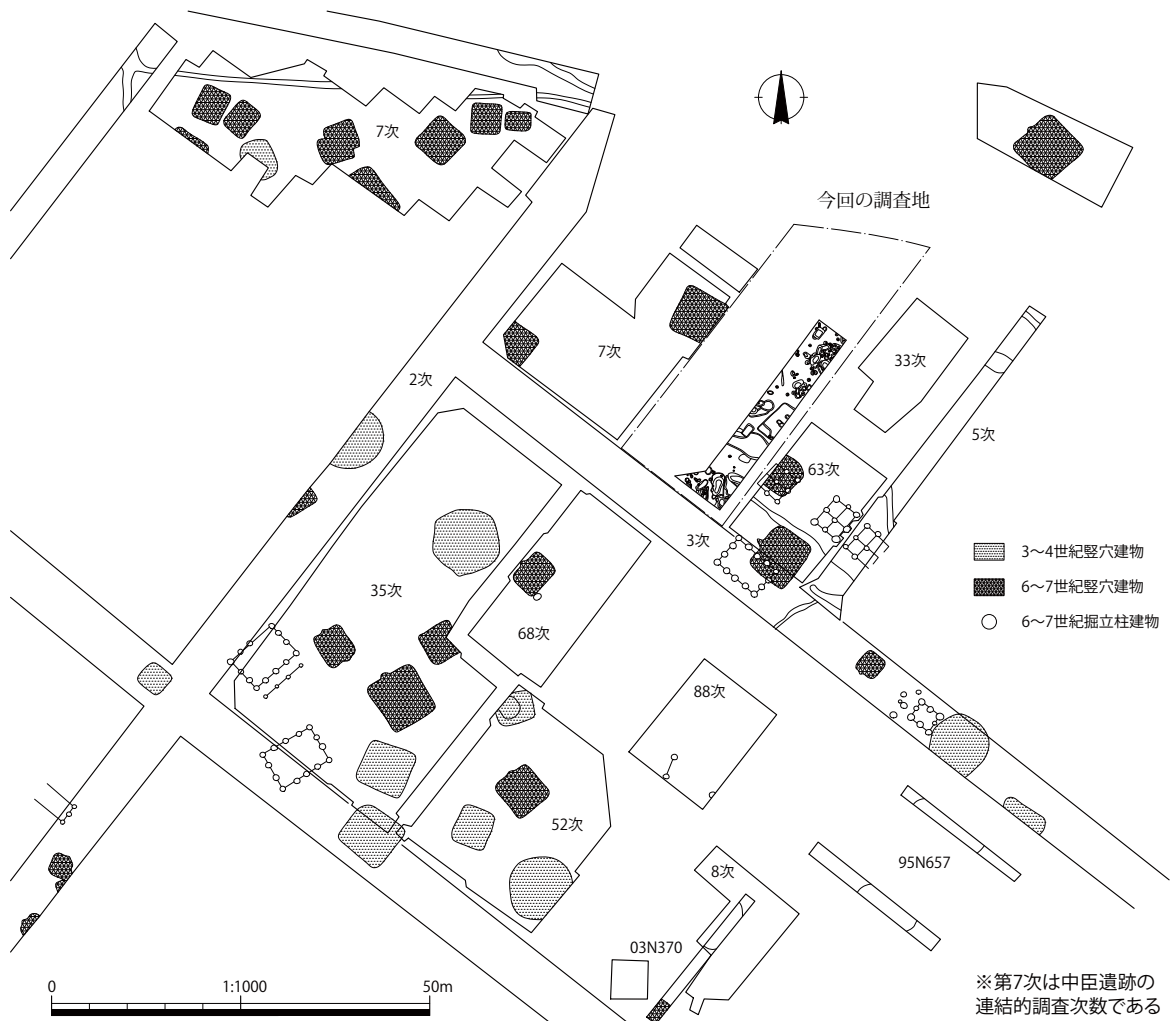
遺跡内の土地利用の歴史は、2万5千年程前と推定されている旧石器時代に既に始まっている。この旧石器時代以降の縄文時代晩期から弥生時代前期・中期の、盆地全体の中でも古く位置付けられる遺構・遺物が、遺跡の北東部の山科川両岸地域における、中臣遺跡23次・73次・74次調査によって確認されている。続く弥生時代中期の遺跡は、先の23次調査地において方形周溝墓群の一端が確認されているが、同中期から後期にまで幅を見ておく必要がある方形周溝墓群は、今回の調査地の近接地域となる遺跡の西辺中央あたりでも確認されるようになる。このように墓地群は発見されているが、住居址的遺構がほとんど発見されていない点は注意を要する。墓地群の近接地に住居址を中心とする集落が並存している例は、全国的には少ない。今後検討が必要な課題である。

弥生時代後期から古墳時代初め頃の竪穴住居址（群）は、遺跡内のほぼ全域の調査地で確認出来る。局所的には空閑地も多く存在しているであろうが、全域が一大集落遺跡を呈するのか、十分な検討が必要な程の盛況を呈するようである。しかし、古墳時代中期頃には、集落址は急速に縮小するようである。同中期後半頃には集落地に代わり、遺跡南東部の79次調査地では小型の方墳群が確認されるだけとなる。

古墳時代も後期から末期（飛鳥時



第4図 中臣遺跡概要図 (S = 1/20000)



第5図 調査地周辺の既調査位置図 (S = 1/1000)

代)、さらに続く古代初め頃にかけては、遺跡全域が再び大きな盛期を迎えたと言える。遺跡中央部付近には、中臣十三塚とされた古墳群が形成され、遺跡の全域で隅丸方形の竪穴住居址が展開していたと見られる程に、各調査で住居址が確認されるようになっている。既存の土器の年代観では、古墳時代後期（6世紀）～古墳時代末期の7世紀それも前半頃までに、盛期の比重がおかれているような理解が示されているが、土器編年観を妥当に修正してみると、6世紀末以降、古墳時代末期（古代初め頃）となる7世紀～8世紀初頭頃に、集落遺跡の大きな盛期があったと理解される。古墳時代最末期（7世紀後半・飛鳥時代後半）から古代初め頃（7世紀末～8世紀前半）には竪穴住居址に加えて、遺跡南部の16次やその北西方向の44次の調査地などから、宮殿クラスを含む掘立柱建物址が確認されるようになる。古墳時代最末期頃（7世紀後半）には、土地利用の質的变化も加わるようである。しかし、奈良時代以降には、遺跡は急速に衰退するようにも見えるが、盆地全域に拡散すると見るのが妥当だろう。古代律令国家の成立により、国家耕作地の条里的整備、集落の移動など、国家主導の地域社会の再編が進む結果と考えられる。しかし、古墳時代後半から古代、さらに中世への遺跡の変化（歴史）に関しては、本質的にはそれ以前も同様であるが、89次までの調査成果の総合的整理・研究を加えた上で、理解を深める必

要がある将来に積み残された大きな課題であると考えている。

## 2. 調査地近接地域の既調査

今回の 89 次の調査地は、遺跡の南西部の北部中位付近に位置している。この地域は、地形的には北東部が高く、西南辺の旧安祥寺川方向に緩く下がっていく丘陵斜面地であった。1980 年代頃より以前は耕作地として、その後は現在に至るまで宅地として、所有地単位を基本とした籬段造成が加えられてきた地域である。既に住宅が建っている周辺のほとんどの宅地では、建設に先立って発掘調査が実施されている。当調査地の西側では 7 次、東側では 5 次・33 次・63 次、南側では 8 次・35 次・52 次・68 次・88 次、また宅地間の道路においても 2 次・3 次とそれぞれ小規模ではあるが多数の発掘調査が実施され、その多くは報告書が刊行されている。また、周辺地域の調査成果は、京都市によって地図上にまとめられている。その図に今回の調査成果も加えて第 5 図に示しておいた。

この地域では、個々で差はあるもののほとんどの調査地で、耕作地表土下約 30 ～ 40cm から 70 ～ 80cm の深さで、地山（自然堆積層）直上の古代以前の遺構成立面（遺構面と通称する）が検出されている。検出されている遺構面は、水平に近い平坦な面として検出されている例がほとんどのようだ。多くは水田などの耕作地の造成による削平の結果と見られる。今回の調査地でも遺構面は、北半と南半で 30cm 程の段を持つが、それぞれ地山直上の水平に近い平坦面として検出されている。

この近接地域の既調査地では、ほぼ共通してこの地山直上の遺構面において、弥生時代後期から古墳時代初め頃の円形や隅丸方形の竪穴住居址を主体とした遺構群と、古墳時代後期から末期、さらに古代初め頃にかけて比定出来る隅丸方形の竪穴住居址や掘立柱建物址を主体とした遺構群、この大きく分けて 2 時期の遺構群が、混在したり切り合ったりするかたちで検出されている例が大半を占めている。出土遺物も前後の時期のものも少数出土するが、先の 2 時期に位置付けられるものが量的にも中心である。今回の調査地でも、この 2 時期に分けられる遺構群を検出しており、周辺の既調査地の調査成果と齟齬は見られない。

これら 2 時期の竪穴を主体とした遺構群に、分布状況の大きな差異は見出しにくく、両者ともに大きな中臣の集落内の 1 ブロック、大集落の単位地区を形成している住居群であると考えている。分布を見ていると最小単位は、3 ～ 4 の複数棟の集合単位のようにも見えるが、分析は将来の課題であろう。

## 参考文献

- 『京都の歴史 - 1 平安の新京』 京都市編 学芸書林 1970 年
- 『史料 京都の歴史 - 山科区 11』 京都市編 平凡社 1988 年
- 『国史大辞典』 第 14 巻他 国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 1993 年
- 『謎の古代 - 京・近江 京滋文化の源流を探る』 京都新聞社編 河出書房新社 1981 年  
「ヤマト政権と京滋の豪族」 平野邦雄・他
- 『本願寺と山科二千年』 山科本願寺・寺内町研究会編 法蔵館 2003 年  
「原始 古代の山科」 丸川義広  
「平安時代の山科 - 条里と古道」 金田章裕・他
- 『歴史の眠る里 わが山科』 飯田道夫 人間舎 2015 年
- 『京都府遺跡地図 第 4 分冊 (第 2 版)』 京都府教育委員会 1985 年
- 『京都府遺跡地図 第 4 分冊 (第 2 版)』 京都府教育委員会 1989 年
- 『京都市遺跡地図台帳』 京都市埋蔵文化財調査センター編 京都市文化市民局 2003 年
- 『日本の自然 地域編 5 近畿』 大場秀章・他 岩波書店 1995 年
- 『発掘ものがたり宇治』 杉本宏 宇治市歴史資料館 1996 年
- 『おぐら池 - 入江、大池、巨椋池 - 』 宇治市歴史資料館 2003 年
- 『宇治橋 その歴史と美と』 宇治市歴史資料館 1995 年
- 『宇治の歴史と文化』 宇治市教育委員会 1988 年
- 『宇治市史 1 ~ 6』 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編 宇治市 1973 ~ 1981 年

## < 報告書 >

- |  |                             |        |
|--|-----------------------------|--------|
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 51 年度』<br>「中臣遺跡 7 次調査」 1977 年報告       | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>伊東 潔      | 2008 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 52 年度』<br>「中臣遺跡 8 次調査」 1978 年報告       | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>上村和直      | 2011 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 53 年度』<br>「中臣遺跡 16 次調査」 1979 年報告      | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>網 伸也      | 2012 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 54 年度』<br>「中臣遺跡 23 次・33 次調査」 1980 年報告 | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>上村和直      | 2012 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 55 年度』<br>「中臣遺跡 35・44 次調査」 1981 年報告   | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>伊東 潔・網 伸也 | 2011 年 |
| 『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 57 年度』<br>「中臣遺跡 52 次調査」               | (財)京都市埋蔵文化財研究所<br>平方幸雄・辻 裕司 | 1982 年 |

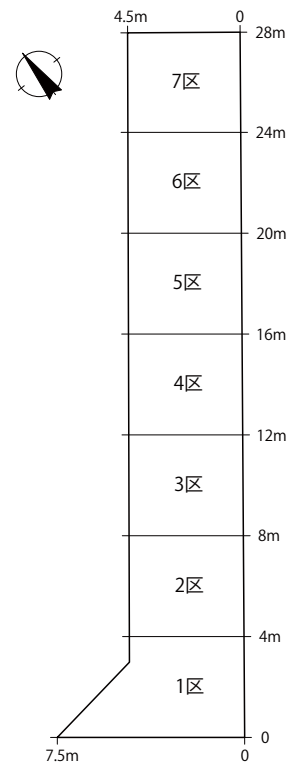


『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 60 年度』 「中臣遺跡 63 次調査」 1986 年報告	(財)京都市埋蔵文化財研究所 丸川義広・木下保明	1988 年
『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和 62 年度』 「中臣遺跡 68 次調査」 1988 年報告	(財)京都市埋蔵文化財研究所 平方幸雄	1991 年
『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 6 年度』 「中臣遺跡 73 次調査」	(財)京都市埋蔵文化財研究所 内田好昭・高橋 潔・他	1996 年
『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 7 年度』 「中臣遺跡 76 次調査」 1998 年報告	(財)京都市埋蔵文化財研究所 平方幸雄・高 正龍	1999 年
『京都市埋蔵文化財調査概要 平成 11 年度』 「中臣遺跡 79 次調査」	(財)京都市埋蔵文化財研究所 内田好昭・高 正龍・他	2002 年
『中臣遺跡』 菅田 薫 ※ 1 次～ 6 次調査までについての記載を参考にした	(財)京都市埋蔵文化財研究所	2006 年
『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 26 年度』	京都市文化市民局	2015 年

# 第3章 遺構

## 第1節 調査区と地区割り

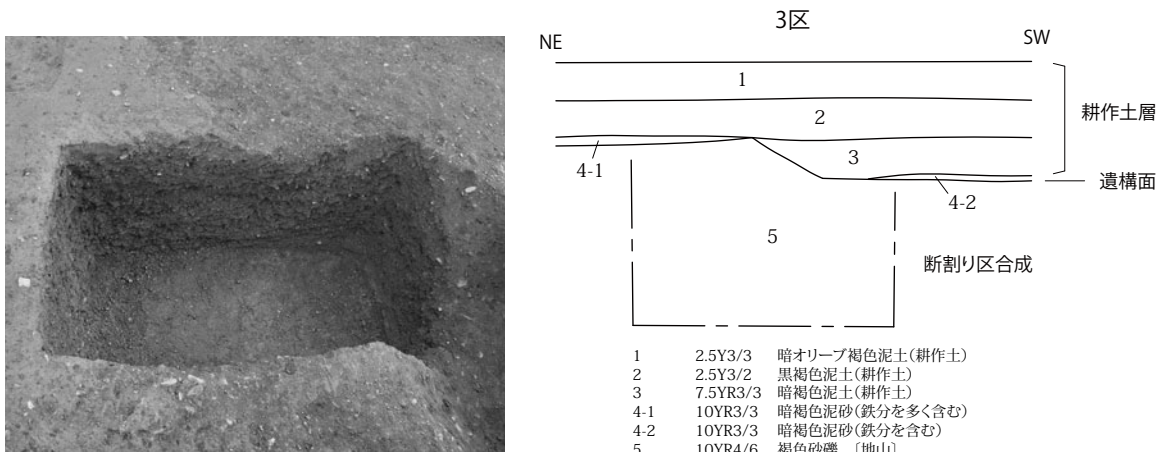
調査区は、指導に基づいて敷地の東辺に沿い、東辺 28m × 北辺 4.5m を基本とし、南端部を西へ三角形状に張り出した変形部を付して設定した。調査区規模は、ほぼ 130㎡ である。調査を進めるにあたって、南北方向を 4m 単位で区画した。この区画は、南から北へ 1 区～7 区とし、包含層からの遺物の取り上げ単位や遺構の住所等として使用した。遺構密度は、1 区及び 5 区～7 区がピットなどの小型の検出数が多く、総じて高い印象であった。間の 2 区～4 区は、遺構数は大型遺構が主体であり、面積率は低くはないようだ。



第6図 調査区区割り図 (S = 1/300)

## 第2節 基本層序

遺構面は、自然堆積層である砂礫を主体とした地層の上面であり、上面には鉄分他が染み込んで固くなった部分的な薄い土層がかぶる所が斑状に確認された。遺構検出作業では同層は取り除いた。遺構面は 3 区の北辺付近で段が付き、高い北側、低い南側ともにほぼ平坦面を成しており、後代の削平の結果作り出された遺構面と見られる。高い北側で表土下 0.4m 程、低い南側で 0.6～0.7m 程を測る。遺構面上面に堆積する耕作土層は、3 層以上に分層が可能である。耕作土層



第7図 東壁による基本層序断面概念図

からの出土遺物は、少数だが弥生土器片から近世以降・近現代までと幅が広く、層位形成の年代の推定根拠とはなりにくい。遺構面で調査した遺構の下限年代が古代前半頃から、一部の溝状遺構が古代末～中世以降と推測されることから古代後半～平安時代の内には、耕作地化していた可能性は高いと見られる。しかし、中世以降に現状の遺構面まで削平され、耕作地が造りなおされたと見られる。水田化が主目的だったと推測され、水田の使用の期間はかなり長く、中世以降近代までは水田的土地利用が続いたと見られる。水田から畑地への転換は、昭和でも戦後となってからであろう。

### 第3節 遺 構

遺構面において掘り下げ調査を実施した遺構は、全体では攪乱坑2基を含み総数は119基となる。その種類別の基数と地区別分布数、及び遺物が出土した遺構数などは、第1表にまとめておいた。2区～3区では、遺構密度が低いながらも全体的にはかなりの数の遺構を検出し調査している。しかし、遺構内の埋土などから遺物が出土したものは少数にとどまり、遺構数に対する出土率は10%程である。遺構検出作業中で埋土直上面からの出土遺物を加えても20%を大きく超えないようだ。遺物が出土した遺構と無遺物遺構の構内堆積土に大きな差はなく、褐色砂泥土あるいはよりよごれの強い暗褐色砂泥を主体としたものが大半を占めている。無遺物遺構の多くは、近世・近代を主とする中世以降の耕作関連での掘り込み痕跡と見ている。

弥生土器は、中期のものがピット2から、後期のものが土坑18などから壺体部小片が出土しているが、耕作土中などから出土したものと同様で古手の混入遺物である。遺構の年代は、古墳時代末期以降に比定している。土坑6・7・8・18、ピット2・3・8、掘込7などから出土している土師器、須恵器は古墳時代末期（飛鳥時代）から古代初め頃に比定されるものが中心であり、遺構の年代も同末期から古代初め頃、あるいはそれ以降と見られる。これらの遺構は同期の集落と関連するものだろう。出土遺物から、古代前期以降から中世前半期に確定出来る遺構は確認出来なかった。掘込2は出土している土師器皿などから、中世末期頃に位置付けられる例外的な

第1表 遺構数一覧

地区	遺構数	遺構の種類	遺構（総）数	内遺物出土遺構数（遺構No）
7区	28基	①土坑	21基	4基（土坑6・7・8・18）
6区	21基	②ピット（柱穴含む）	78基	3基（ピット2・3・8）
5区	14基	③掘込（方形状含む）	8基	2基（掘込2・7）
4区	9基	④落込	6基	0
3区	5基	⑤溝	3条	1条（溝2）
2区	5基	⑥溝状遺構	1基	0
1区	37基	⑦攪乱坑	2基	2基（近・現代遺物）
総数	119基	全遺構総数	119基	12基（遺物出土率10.08%）

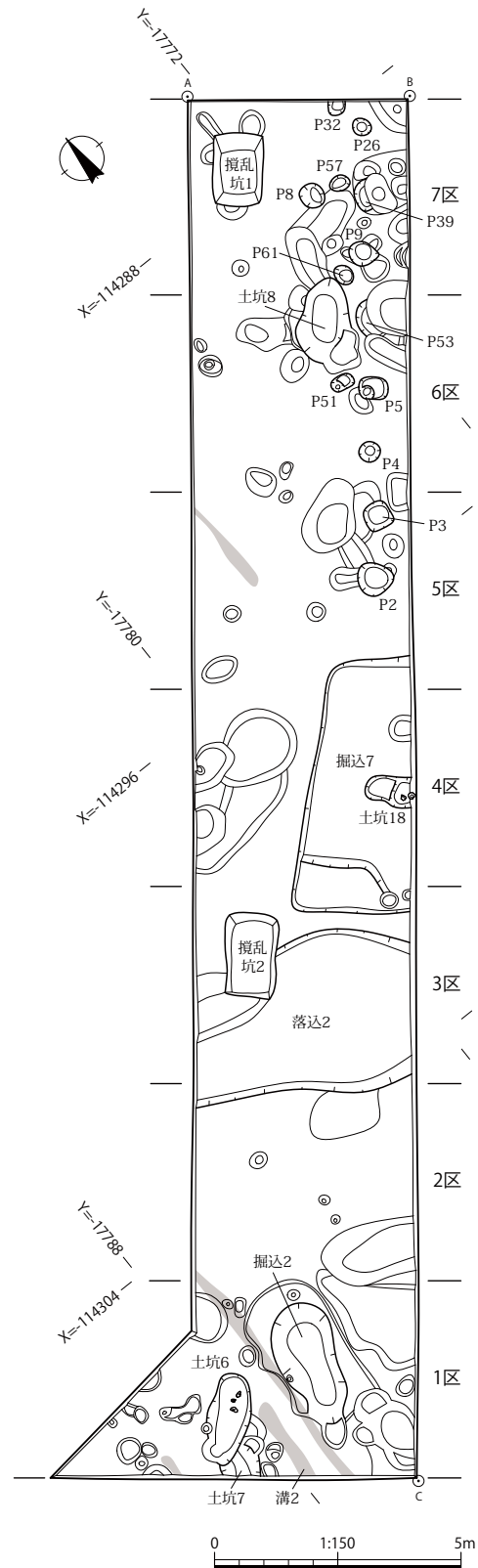
遺構である。耕作と関連するものと見ておきたい。

遺構面直上より上位に位置している数層の耕作土層は、掘込2との関連からは、中世末期以降から近・現代の水田、あるいは畑作に関連する、生産地的遺構ではある。しかし、中世末期（から近世初頭）頃に再構築された可能性が高く、当地の耕作地化は、古代のかなり早い段階まで遡るものと見ている。

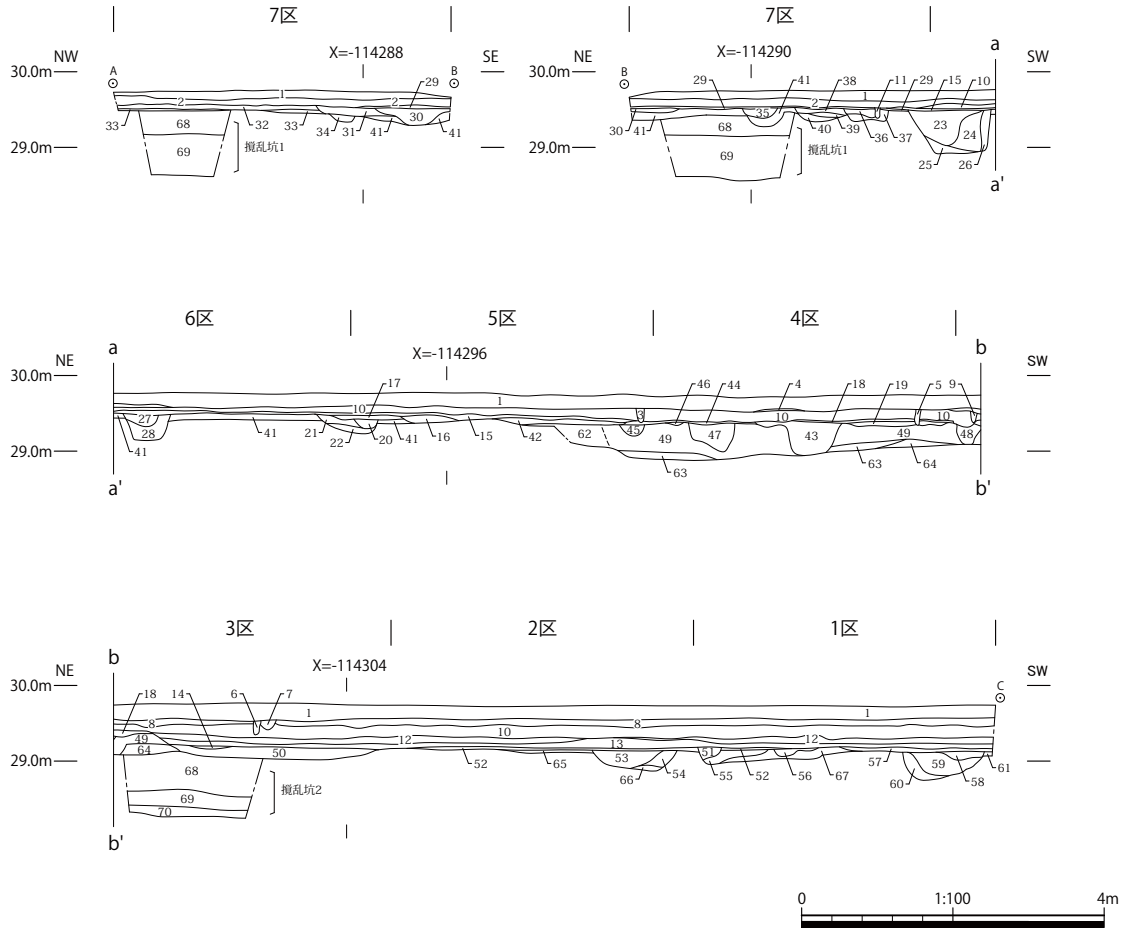
以下では、図を掲載した遺物が出土し、古代以前に年代特定が可能な遺構や、遺構性格が推測出来るものを主にして説明を記す。

第8図に示した3区北辺～5区南辺にかけて検出した掘込7は、半分弱しか検出していないが、2角と5.2m程を測る一边を検出した隅丸方形であり、直立的にも見える側壁の様相とその25cm程の深さからは、竪穴住居址的な遺構ではある。6層下の7層上面もほぼ平坦であり、一時期の床面とも見て、精査し記録した。さらに7層を掘り上げて同様に、床面的な平坦面を検出し精査した。しかし、どちらの面でも壁側溝や、柱穴を検出することが出来なかった。条件を満たしていないこの単体資料で、この遺構を竪穴住居址と断定的には規定出来ないが、中臣遺跡の既調査例には、壁溝や柱穴が検出されていない同様の資料が少なからず確認出来る。ここでは方形状掘込7としたが、いわゆる竪穴住居址との解釈も十分に可能と考えている。なお6層からではあるが、受け口状の口縁を有した長甕片が出土していることから、古墳時代末期（7世紀・飛鳥時代）～奈良時代初め頃の幅の内に位置付けられると見ている。

土坑6は、1区の西部で検出している。平面形は、一部変するが北東から南西方向の長軸を持つほぼ楕円形を呈する。長軸は1.8m程、短軸は0.85m程を測るが、深さは0.12m程と浅い土坑である。地山土が少しよごれた印象の暗褐色泥砂土で埋まっていた。構内土中からは、少量ではあるが須恵器長頸壺

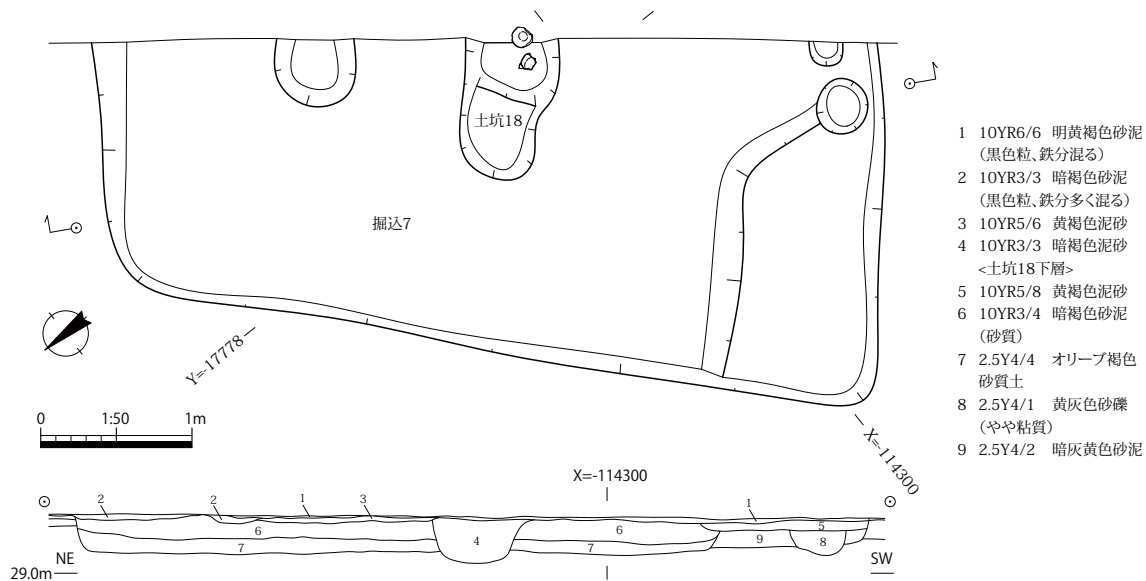


第8図 調査区平面図 (S = 1/150)



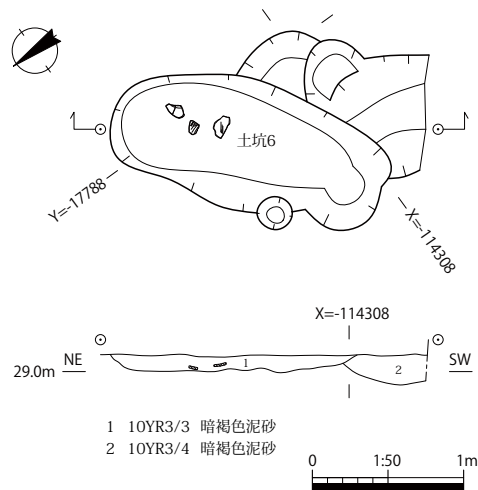
1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色泥土(耕作土)	36	10YR3/4	暗褐色泥砂
2	2.5Y3/2	黒褐色泥土(床土)	37	10YR2/3	黒褐色泥砂
3	10YR4/3	にぶい黄褐色泥土(杭跡)	38	10YR3/4	暗褐色泥砂
4	10YR4/4	褐色泥土	39	10YR4/4	褐色砂泥
5	10YR5/3	にぶい黄褐色泥土(杭跡)	40	10YR4/6	褐色砂泥
6	10YR3/3	暗褐色泥土(杭跡)	41	10YR4/6	褐色砂泥
7	10YR5/4	にぶい黄褐色泥土	42	10YR5/6	黄褐色砂泥
8	2.5Y4/2	暗灰黄色泥土	43	10YR3/4	暗褐色泥砂(弥生土器片含む)【土坑18】
9	10YR3/3	暗褐色泥土(杭跡)	44	10YR3/4	暗褐色泥砂(鉄分を多く含む)
10	10YR3/3	暗褐色泥土(床土)	45	10YR3/4	暗褐色泥砂に10YR4/6褐色砂礫が混じる
11	10YR5/4	にぶい黄褐色泥土(杭跡)	46	10YR4/6	褐色砂泥
12	7.5YR3/3	暗褐色泥土(耕作土)	47	7.5YR4/4	褐色砂泥
13	2.5Y4/4	オリーブ褐色泥土(床土)	48	10YR3/4	暗褐色泥砂
14	10YR3/3	暗褐色泥砂(鉄分を含む)	49	2.5Y4/6	オリーブ褐色泥砂【掘込7】
15	10YR3/3	暗褐色泥砂(鉄分を多く含む)	50	2.5Y4/6	オリーブ褐色砂礫(φ2~5cmの礫が混じる)【落込2 流路】
16	10YR3/4	暗褐色泥砂	51	10YR4/3	にぶい黄褐色泥砂
17	10YR3/3	暗褐色泥砂	52	10YR3/3	暗褐色泥砂(鉄分を含む)
18	10YR3/2	黒褐色泥砂(鉄分を含む)	53	10YR3/4	暗褐色泥砂
19	10YR3/3	暗褐色泥砂	54	10YR4/4	褐色泥砂
20	10YR4/3	にぶい黄褐色泥砂	55	10YR4/4	褐色泥砂
21	10YR3/4	暗褐色泥砂	56	10YR3/4	暗褐色泥砂
22	10YR3/4	暗褐色砂礫(φ5~8cmの礫が混じる)	57	10YR3/3	暗褐色泥砂(鉄分を多く含む)
23	10YR3/4	暗褐色泥砂	58	10YR3/4	暗褐色泥砂
24	7.5YR3/2	黒褐色泥砂	59	10YR3/3	暗褐色泥砂
25	7.5YR3/4	暗褐色泥砂	60	2.5Y6/6	明黄褐色砂泥 <地山>
26	7.5YR4/4	褐色泥砂	61	10YR5/4	にぶい黄褐色泥砂 <地山か>
27	10YR3/4	暗褐色泥砂(φ2~5cmの礫が混じる)	62	2.5Y6/4	にぶい黄色砂泥 <地山>
28	10YR3/3	暗褐色泥砂	63	2.5Y5/3	黄褐色砂礫 <地山>
29	10YR3/3	暗褐色泥砂(鉄分を多く含む)	64	2.5Y5/4	黄褐色砂礫 <地山>
30	10YR3/4	暗褐色泥砂	65	2.5Y6/6	明黄褐色砂質土 <地山>
31	7.5YR5/2	灰褐色泥砂	66	2.5Y4/4	オリーブ褐色砂礫 <地山>
32	10YR4/2	灰黄褐色泥砂(鉄分を含む)	67	2.5Y4/3	オリーブ褐色砂礫(φ5cm程の礫が混じる) <地山>
33	10YR5/3	にぶい黄褐色泥砂	68	10YR4/6	褐色砂礫(φ2~10cmの礫が混じる) <地山>
34	10YR3/4	暗褐色泥砂(φ3~5cmの礫が混じる)【P32】	69	7.5YR4/1	褐灰色砂礫(φ5~8cmの礫が混じる) <地山>
35	10YR3/4	暗褐色泥砂	70	2.5Y5/3	黄褐色細砂 <地山>

第9図 調査区土層断面図 (S = 1/100)



第10図 掘込7平面・セクション断面図 (S = 1/50)

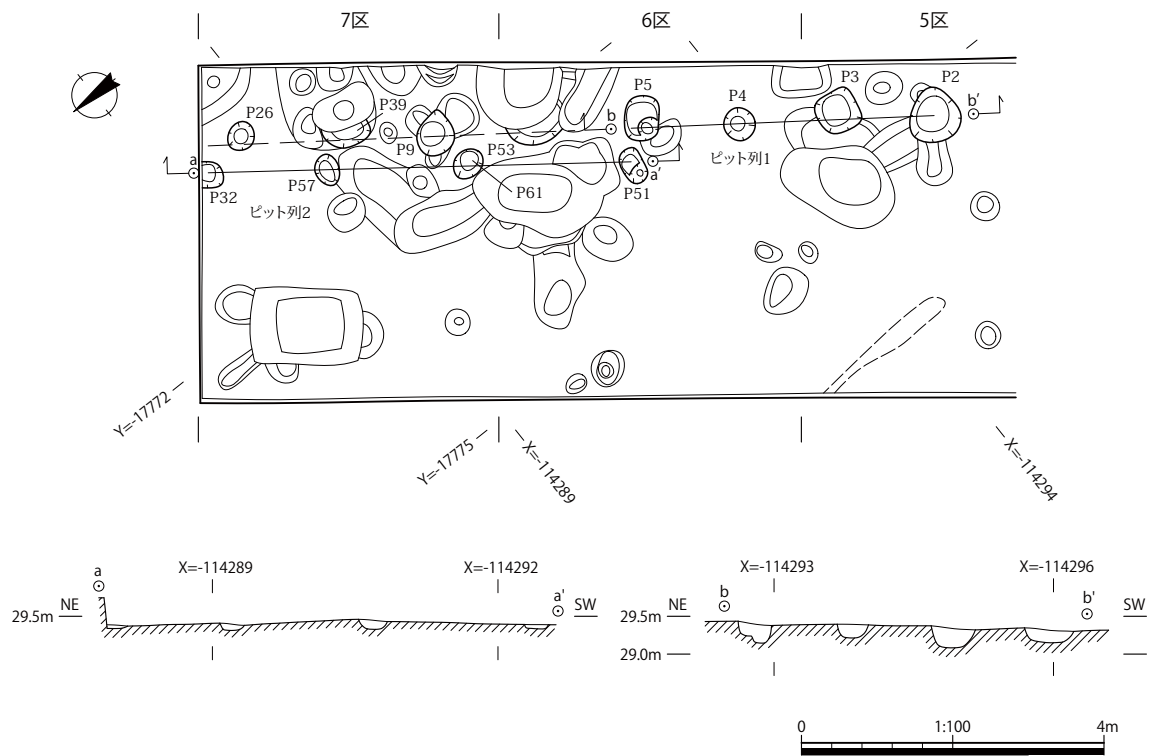
や土師器の長甕の比較的大きな破片などが出土している。これらの出土遺物から7世紀後半から8世紀初頭頃には埋没していたと見ている。1区の遺構は、中世以降と見られる新しい時期の遺構に30cmを超える深いものも見られるが、土坑6他の古代以前の遺構は総じて浅い。北東部の4～7区に比べて1～3区は、調査地の以西から南西がさらに低くなっている地形から見ると、耕作地の造成の際に削平された地区の可能性が高いと考えられ、その結果として古代以前の遺構が浅くしか残っていなかったとも推測される。このような遺構の残存状況からその性格理解も難しい。



第11図 土坑6平面・セクション断面図 (S = 1/50)

調査区の北東部となる5～7区の北東半において、北東から南西方向に並び、0.5m程の間隔でほぼ並走する2条のピット列を検出している。調査区の東壁に近い側をピット列1とし、その北西側をピット列2とした。

ピット列1は、心々間1.3m程で2・3・4・5の並びは明瞭に認識出来た。平面形の大きさは径0.4～0.6m程であり、深さは0.2m前後で浅い。堆積土は褐色・暗褐色の泥砂土である。5だけは、柱あたりの土の変化が認識出来たので掘り分けた。この例から2～4の各ピットも柱穴と見てよいと考えている。また5より北東では、残存状態が悪いので断定的理解としては示せないが、53・9・39・26が同じ1.3m程の間隔で、同方向に直線上に並ぶ。2～5に列なる並びの可能性



第 12 図 ピット列 1・2 断面図 (S = 1/100)

は高いと見ている。5より北東分を入れると8間以上の長い列となる点などから、地域境などに設けられた柵列などの柱穴列であろうと見ている。3からは土師器長甕の口縁片も出土しており、古墳時代末期（7世紀・飛鳥時代）頃には機能しており、7世紀後半から8世紀初頭頃までには埋没していたものと見ている。なお、2の構内からは弥生時代中期の土器小片が混入品として出土している。

ピット列2は、先の5に最も近い51から北東に61・57・32と列っており、51と61が心々間2.1m、61と57及び57と32はどちらも1.8m程で、同方向の一直線上に並ぶ。これらのピット列2は、柱間から6尺と7尺となっており、南東側に対応する柱列が発見される可能性も残すが、ピット列1と同じ性格を持った柵列の柱を受けた柱穴と見ている。成立時期は、どちらが先行するのか決定的根拠が発見されなかったため、先後は決定出来なかった。しかし、堆積土の類似性からも、7世紀から8世紀前半頃の時間幅の中で、それぞれが単独的に機能していたと考えている。なお、両柱穴列は現在の地境とほぼ同じ方向をとっているため、古墳時代末期頃からの古代初め頃の集落も、現代の地割り境の方向も、丘陵の原地形に大きく影響を受けているものと理解しておくが、今後検討の継続による理解の深化の必要な課題の一つである。

## 第4章 遺物

縄文時代以前から弥生時代前期の遺物は、全く出土が見られなかった。今回の調査により出土した最も古く位置付けられる遺物は、ピット2から出土した弥生時代中期頃に比定出来ると見ている、櫛描文様が施された壺体部の小片1片のみである。遺構に対しては古手の混入品である。同様に包含層や新しい遺構への混入資料が中心であるが、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の土器片が少数ながら確認出来る。

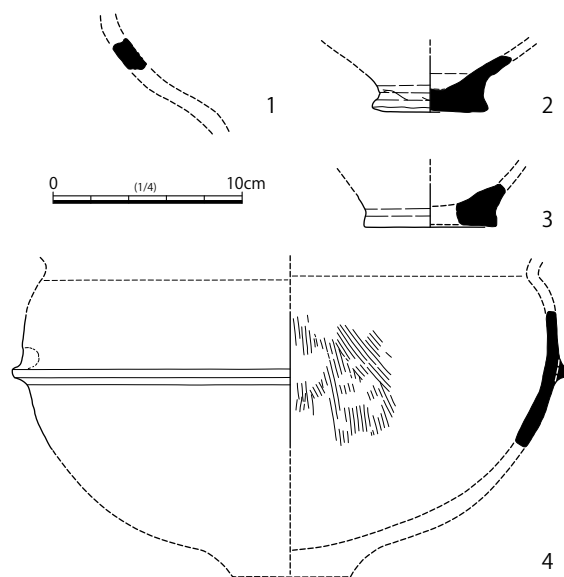
遺構などに伴うかたちで若干なりにも出土量が多くなるのは、6世紀末頃から8世紀ぐらいの幅には収まる、古墳時代後期末頃及び同末期頃（いわゆる飛鳥時代とほぼ重なる）から古代初頭の奈良時代初め頃に位置付けられる土師器、須恵器などの土器である。ピット2・3他、土坑6や方形掘込7などから出土している。この時期の瓦類は出土が見られなかった。

古代の奈良時代初め頃以降から平安時代、また続く鎌倉時代から室町時代の中世の大半の時間幅の遺物もほとんど見られなかった。しかし、中世も末期となる室町時代末期から桃山時代前半、西暦でいう16世紀中葉から後半頃に位置付けられる土師器皿片が極少数ながら出土が見られる。しかし、近世遺物もほとんど見られず、近代の遺物も少数にとどまっている。

本調査地からの遺物の出土状況からは、弥生時代後期から古墳時代初頭頃、次に古墳時代後期から古代初め頃の、大きくは2時期に遺跡の盛期があることを示していると読み取れ、既調査の成果と大きな齟齬はない。中臣遺跡の調査地を含む一帯は、古代の奈良時代頃を境に耕作地化が大きく進んで、近代に至るまで耕作地帯であり続けたようだ。宅地開発は戦後の高度成長期以降である。

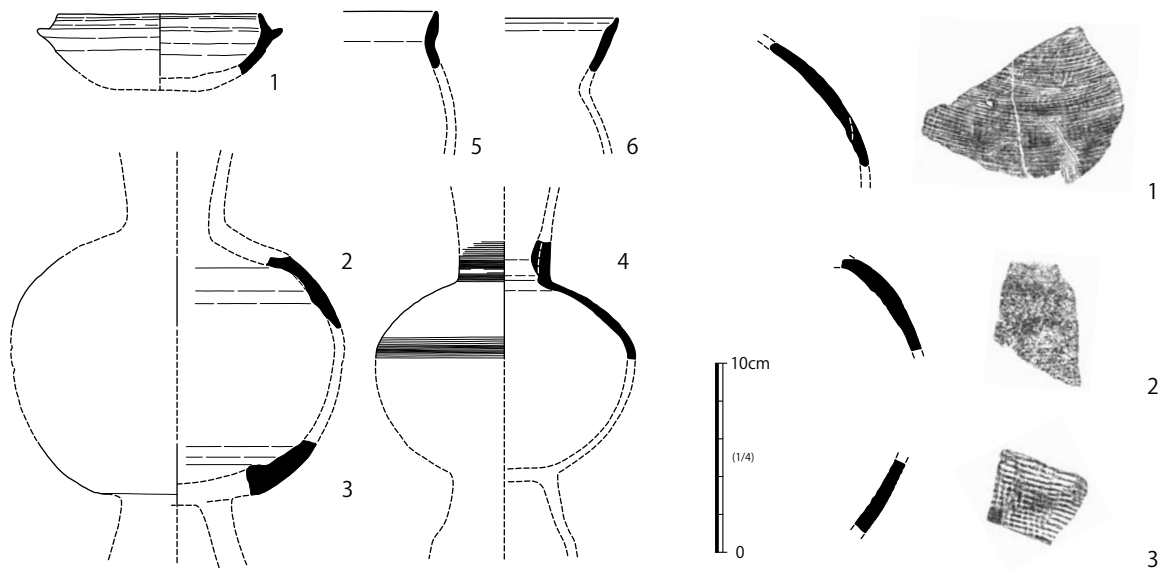
以下では図と図版4-4に掲載した個々の土器の解説を主に記しておく。なお、図版に掲載している14-9・10は14-8と同一の個体であり、図版のみの掲載としている。

第13図 - 1は、ピット2への混入品として出土した弥生土器壺の体部の上部あたりに位置すると見られる小片である。外面には櫛描文様を施しており、その様相などからも同中期頃に位置付けておく。第13図 - 2・3は、壺あるいは甕の小さいφの平底の底部片である。第13図 - 4は、器高の低く体部中位に突帯が付く。器高の低さや突帯などから、いわゆる手あぶり形の土器の可能性も残るが、体部外面に使



第13図 弥生土器

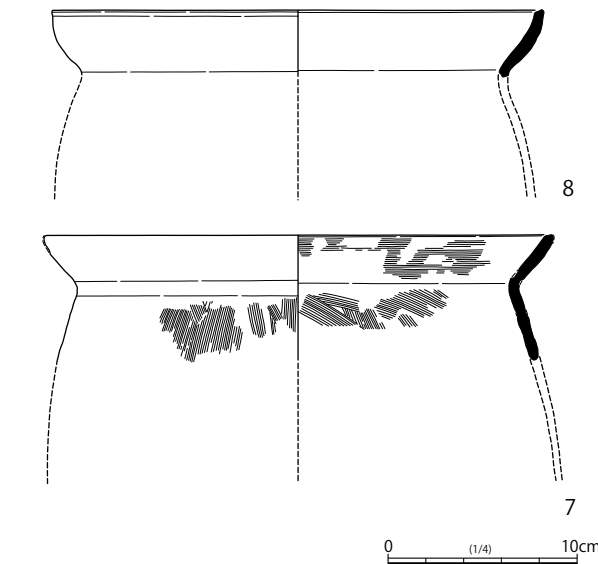




第 15 図 須恵器壺・甕片

用痕と見られる煤が付着している点などから、鍋的な意味を持った器高の低い煮炊具の甕と見ておく。罅部径が 29.4cm を測り、この器形では大きい方である。第 13 図 - 2 ~ 4 に関しては、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の幅の内に位置付けておく。

第 14 図 - 1 は、遺構面の直上から出土した須恵器坏 H<sup>1)</sup> の身である。受け部径は 13.0cm、口縁部径は 10.8cm を測る。口縁の立ち上がり部は高さが残るが、端面はほぼ不明瞭となっている。



第 14 図 古墳時代末期～古代初め頃の土器

残存する上半部の型式的特徴からは、田辺編年<sup>2)</sup>でいう TK217 型式に属するものと見ておく。第 14 図 - 2・3 は、遺構面直上から出土した須恵器壺の体部片である。推定胴径は、4 よりも大きいと同形の長頸壺の体部片と見ている。焼成が少々甘く灰白色を呈し、外面にはいわゆるカキ目が残る、体部は回転によるナデ痕とその凹凸が残っている。第 14 図 - 4 は、須恵器長頸壺の体部上半から頸部下部の破片である。4 の須恵器壺は、外面の頸部下端部から外部外面は、丁寧な回転によるカキ目を施している。第 14 図 - 5・6 は、5 が遺構面直上、6 はピット 3 内から出土した土師器甕の口縁部である。5 は 6 などの長胴甕と共伴出土例の多い推定口径が 15 ~ 6cm 程の小振りの甕である。6 は若干凹んだ内傾する端面を持った、受け口状の口縁形態に特徴のある長胴甕の口縁部である。第 14 図 - 7 は、土師器長胴甕の口縁部片であり、4 と共伴して土坑 6 から出土した。7 の土師器の長胴甕は、やや不明瞭ではあるが、基本的には受け口状を呈すると言える特徴的口縁部形態を持っている。同甕は口縁部の内面及び体部の内外面はハケ目調整を施して仕上げている。口縁部から頸部の外面はナデ調整で仕

上げている。第 14 図 - 8 は、竪穴住居址の可能性もある掘込 7 から出土したもので、内傾する端面を持った受け口状の口縁部を有する土師器長胴甕である。先に記した 6・7 とこの 8 は口縁部形態の特徴を共有する同じ形式で、形式的にも同一かあるいは近い型式に属すると見てよいだろう。

第 15 図 - 1・2 は、須恵器壺の体部片であり、これも土坑 6 から共伴出土したものである。両者ともに焼きがやや甘めで器表面の残りが悪いが、外面には回転によるカキ目を残し、内面は回転によるナデ痕を残す。第 15 図 - 3 は、遺構面直上から出土した小振りの甕の体部片である。外面には平行タタキ痕、内面には青海波の受け具痕を残す。

上述してきた第 14 図、第 15 図に掲載した土師器・須恵器は、第 14 図 - 1 の須恵器坏 H を陶邑の田辺編年の TK217 型式に属するこの見方では、従来の実年代観に基づけば 7 世紀第 2 四半期頃となり、7 世紀前年を中心としなければならないが、筆者は 7 世紀後半に位置付けるべきと考えている。坏 H 以外の須恵器長頸壺や土師器長甕、同小甕の様相からは、全体として 7 世紀後半を中心として若干の前後幅を加えた 7 世紀中葉頃から 8 世紀初め頃の時間幅の内に収まる土器群と見ている。

#### 註

- 1) 奈良文化財研究所の型式・形式名称を準用した
- 2) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981 年

## 第5章 総括

今回実施した発掘調査においては、土坑、ピット、掘込他各種の遺構を多数検出したが、遺物の出土した遺構が少なく、量の変化を踏まえた歴史的な状況変化の報告は難しい。しかし、竪穴住居址と見てよいだろう掘込7、あるいは2条の柱穴列、また土坑6など、出土遺物から年代特定が可能であった遺構のほとんどが、古墳時代末期（7世紀・飛鳥時代）から古代初め頃に比定出来た。当調査地では、この時代が当地の宅地的土地利用の最盛期であった。土器の出土しか見られなかった弥生時代後期から古墳時代初め頃の遺跡の様相などについては言及出来ないが、中臣遺跡全体の既調査成果でも明らかとなっている古墳時代末期から古代の初め頃の画期に関しては、十分に追認出来る調査成果であると考えている。

この画期の既調査成果は、土器編年を基にした年代観により、7世紀前半代に大きく比重を置いたものになっており、やや薄く見える第3四半期を挟んで、7世紀末～8世紀前半に再び画期が戻るが如くの見解が有力な通説として語られてきている。田辺編年<sup>1)</sup>におけるTK217型式の年代的位置付けを、私見では7世紀後半へ調整することは、現代の資料増加からは十分に可能であるとの結論を得ている。私見は拙著<sup>2)</sup>に記しているのでここでの記述は避けるが、今回のこの画期の時期に比定出来る土師器・須恵器は、7世紀後半頃を中心に位置付けることが現段階で最も妥当な評価であるとする。この土器の年代観からは、古墳時代最末期（飛鳥時代）の中臣（藤原）鎌足が、山科から近江の湖西南部の大津宮で最も活躍した7世紀第3四半期頃から少し下った第4四半期（合わせて7世紀後半）頃が画期の中のピーク期と十分に理解出来る。

今回の調査成果もその歴史的な遺構の画期を示す一端を担うものであると考えているが、もちろん今回の成果のみで、このような大きな問題に結論を出せたとはいえず考えていない。中臣遺跡は、昭和から平成の現代にかけて89次もの調査が重ねられてきており、蓄積された資料は膨大なものとなってきている。しかし、惜しむらくは土器資料の再編を軸とした総合的研究が、組織的に成されてきた形跡は見出せない。非常に残念な状況下に中臣遺跡は置かれている。私は、自分が久しぶりに関わった今回の発掘調査を契機として、最大の画期である7世紀中葉～後半の中臣遺跡の様相を同時代の中央史上に正確に位置付けたい、というよりも位置付け直さなければならぬと考えている。宇治郷の木幡古墳群・陵墓群と中臣遺跡が大きく関連するものであることの理解も進むであろう。

### 註

1) P20の註2)と同

2) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005年





調査地全景（北東より）



1. 調査区南半北部から北半（南西より）



2. 調査区南部（南西より）

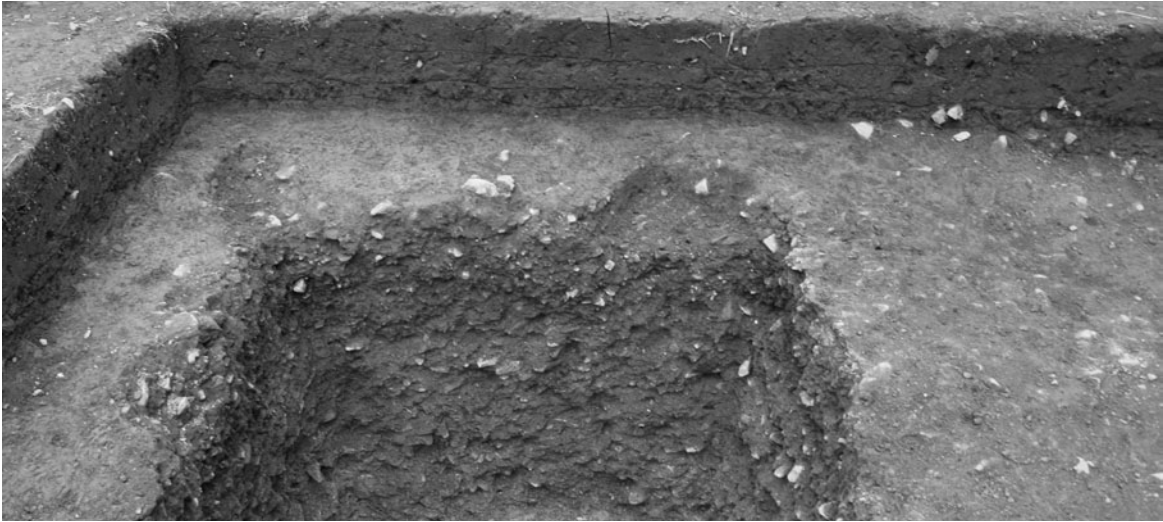




1. 調査区北半（北東より）



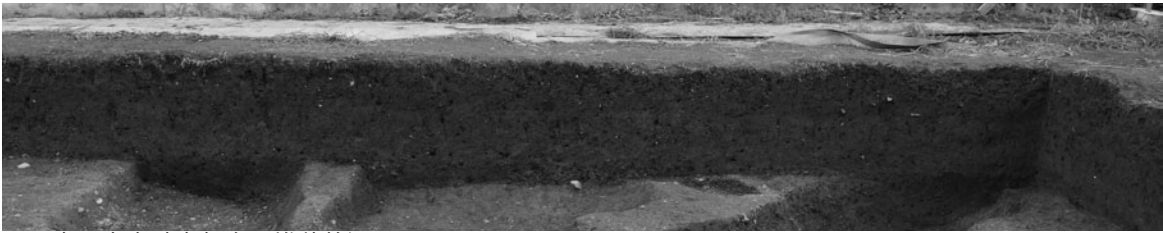
2. 掘込7完掘状況（南西より）



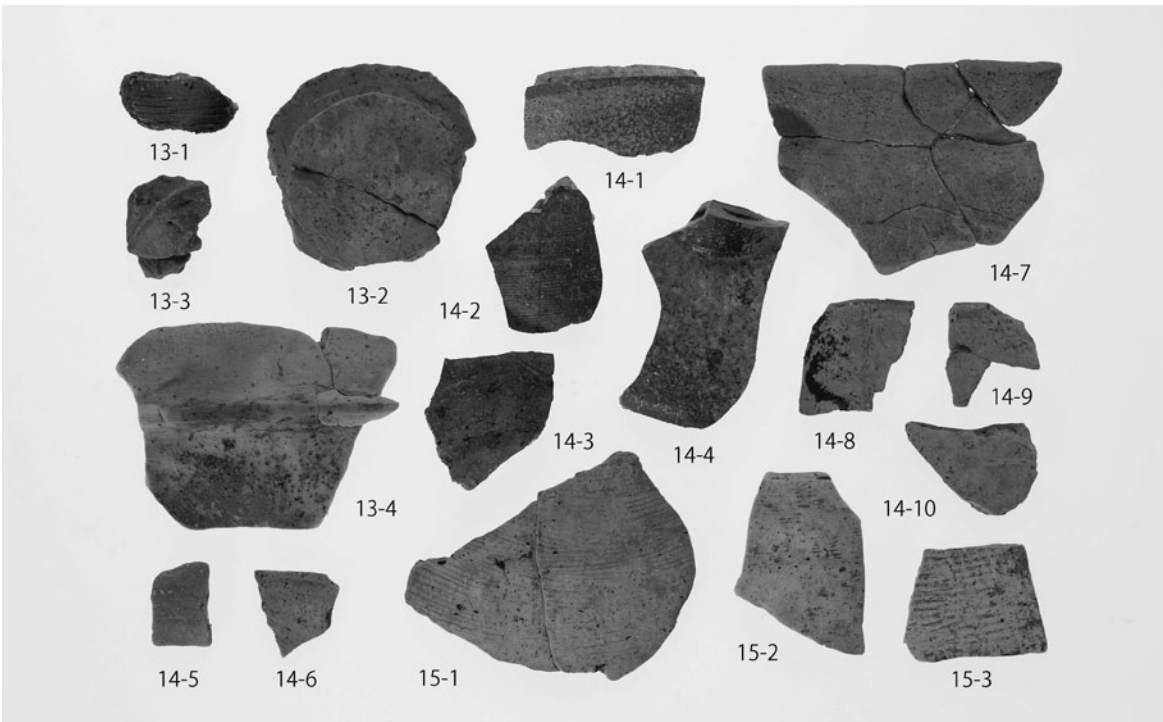
1. 調査区北壁西部土層堆積状況



2. 調査区南東壁中央部（掘込 7）土層堆積状況



3. 調査区南東壁南部土層堆積状況



4. 出土遺物（土師器・須恵器）

※ 14-9・10 は図版のみの掲載



# 報告書抄録

ふりがな	きょうとしやましなく なかとみいせき だいはちじゅうきゅうじはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	京都市山科区 中臣遺跡 第89次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都平安文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	小森俊寛							
編集機関	有限会社 京都平安文化財							
所在地	〒612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後20-4							
発行年月日	2017年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかとみいせき 中臣遺跡	きょうとしやましなく 京都市山科区 かんしゅうじにしくりすのちょう 勸修寺西栗栖野町113	26110	632	34度 58分 10秒	135度 48分 19秒	2016年 11月10日 ～ 2016年 12月20日	130㎡	宅地開発
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中臣遺跡	集落跡  集落跡	弥生時代 後期 ～ 古墳時代初  古墳時代 後期 ～ 飛鳥時代 ～ 古代前半	(推) 竪穴住居址 土坑 溝	弥生土器 壺、甕  須恵器 坏H、壺、甕 土師器 長胴甕				
要約	調査地は旧安祥寺川沿いの栗栖野丘陵の南西斜面に位置する。周辺の既往調査成果で、当地域は弥生時代、古墳時代～古代の両時期ともに竪穴住居址を主体とする住宅地であったようだ。今回の調査で弥生時代に比定できるものは遺物のみであったが、古墳時代後期～古代では(推)竪穴住居址、土坑、溝などを調査している。古代後半以降は耕作地帯となる。							

平成 29 年（2017 年）12 月 25 日発行

京都市山科区  
中臣遺跡 第 89 次発掘調査報告書  
(京都平安文化財調査報告 第 4 集)

編集 有限会社京都平安文化財  
〒 612-8018 京都市伏見区桃山町丹後 20 番地 4  
電話 075-644-6600

印刷 あおぞら印刷株式会社  
〒 604-8431 京都市中京区西ノ京原町 15  
電話 075-813-3350